

日本分析化学会

関東支部ニュース 第14号



2003年9月10日 発行

発行者 (社) 日本分析化学会関東支部

目次

	ページ
1. 関東支部ニュース 巻頭言	2
2. 東京コンファレンスと分析化学会年会とのあり方についての 紹介と説明	3
経緯についての説明	
大学関係の方の意見	
産業界の方の意見	
旧国立研究所関係の方の意見	
アンケート	
3. 特集 企業が求める分析化学を専攻した学生の像	8
4. ミニコミ	9
開催のお知らせなど	
5. 第26回分析化学若手交流会報告	10
6. 第44回機器分析講習会の報告	11
7. 第1回環境分析基礎講座入門コース	12
第1回	
第2回	
基礎講座担当	
分析機器コース	

お願い：今回は東京コンファレンスのあり方についてのアンケートが中に同封されております。お手数とは思いますが、ご都合のつく範囲内でお答えいただければ、幸いです。(ニュース担当委員)

関東支部ニュース 巻頭言

関東支部長 高田芳矩

関東支部は、日本分析化学会の約半数の会員を擁し、その会員は、地域的便宜性もあって、本部の運

営にも係わる多くの役割を担っています。従って、他支部の方には、本部と関東支部とが、過度の密接な関係を持っているように映っているのではないかと懸念しています。例えば、関東支部が、6年間にわたり毎年200万円弱の費用を投じて行ってきた分析展併設の東京シンポジウムを、今年から、「東京コンファレンス」という本部事業として新たな展開を図ることになりましたが、そのケーススタディの一つに、討論会のみを各支部持ち回りとして、年會をこの東京コンファレンスとして実施する案がありました。来年の年會が関東支部の当番に当たることもあって、他支部の方々に大変ご心配を頂くこととなってしまうました。

東京コンファレンスと年會の開催時期が近づき過ぎると、両方に発表を予定される方々には負担が大きくなり、また、ある程度の間隔確保のために10月下旬以降に大学のキャンパスで実施することは難しいこともあって、やむを得ず、来年の年會は東京コンファレンスと期間を一致させ、しかも分析展の会場、幕張メッセに約2km程度と近い千葉工業大学の芝園校舎で行うことといたしました。東京コンファレンスと一体化して運営できれば、上記ケーススタディの実践ができ、本部・支部共通の課題「今後の日本分析化学会における年會と討論会のあり方」に対しての、参考データの蓄積が出来るのではないかと期待しています。

もともと関東支部は、この地域に所属する会員の研鑽と、相互のコミュニケーションを活発にするための事業を主な行事の柱として実施してまいりました。関東支部の創立時から実施されている「分析機器取扱講習会」は途中から「機器分析講習会」とその名称を変えていますが、今年度が第44回になります。番号をつけずに行った年もありますので、関東支部創立以来本年、48周年までほぼ毎年実施してきたこととなります。この間、常に最先端の技術講習を需要に適合する形で行い、多くの受講者を得て実施できたことは会員皆様のご理解と、ボランティアで積極的に貢献された歴代の関東支部役員諸氏のご努力と、さらには分析機器メーカー等のご協力の賜物であると心から敬意を表したいと思います。

地区講演会、新潟地区部会の発表会等、各地区での会員の活性化事業も長年続けられています。また、新年懇親会は、昨年1年のみお休みしましたが、本年から再開いたしました。しかし、見学会は参加者が少なくなり、いつの間にか消えてしまったことは残念に思います。代わって、懇話会が創設され、関東支部OBのご意見が支部の運営に反映される仕組みができました。さらに、ベテランの域に達した優れた研究者への新世紀賞の制度も軌道に乗り始め、この懇話会で受賞講演が聴けるのも楽しみの一つになってきました。昨年度からは、「機器分析講習会」が難し過ぎると言う分析の初心者から、経験2年以内の方々を対象として「環境分析基礎講座」という研鑽の場も新設しました。会員諸氏はもちろん、分析所の経営者や、試験所認定機関からの要望に基づくものです。

皆様には、関東支部の種々の行事にご参加頂き、大いにご意見やご希望を述べていただければ有難く、ご要望に沿えるよう改善を図ってまいります。関東支部の会員相互の活性化と社会への貢献は、それぞれの会員個人の活動の結果であると信じています。一人でも多くの会員が、自分自身の向上と日本分析化学会の発展にも繋がる活動を続けられることを期待します。

東京コンファレンスと分析化学会年会とのあり方についての紹介と説明

経緯についての説明

・東京コンファレンス創設の経緯

実行委員長 中村 洋 (東京理科大学薬学部)

東京コンファレンス (Tokyo Conference) は、「分析化学東京シンポジウム」(主催：日本分析化学会関東支部) と「機器分析東京討論会」(主催：機器分析東京討論会実行委員会) を発展的に統合し、新たに日本分析化学会の本部事業として発足させたものである。「分析化学東京シンポジウム」は6年間の歴史を閉じ、「機器分析東京討論会」(1996年～2002年、7年間) は源流である「応用スペクトロメトリー東京討論会」(1965年～1990年、26年間) とその最初の改称である「分析機器と解析システムに関する東京討論会」(1991年～1995年、5年間) を通算すると、実に38年に亘る長い歴史に幕を閉じたことになる。このように、「東京コンファレンス」が誕生した経緯はやや複雑であるので、その概要を以下にご紹介したい。

ご周知のように、本会は2001年に創立50周年を祝い、その間我が国における分析化学に関する研究教育に多大の貢献を果たしてきた。本会の発展の軌跡は、戦後日本の復興・発展の歩みと軌を一にしたものであった。しかし、バブル崩壊の影響は免れ難く、会員数は1991年をピークとして緩やかな減少傾向を示している。幸い、1998年に発足した会員拡充委員会を求心力とした会員諸氏の奮闘により、本会における会員数の減少率は工学会傘下の理系学会の中では最小ではあるものの、而立を迎えた本会の今後100年の計を確かなものとするためには、抜本的な改革案が必要と思われた。その切り札が、本会の一層のグローバル化である。本会は既に二度に亘って国際分析科学会議 (ICAS' 91 と ICAS2001) を開催し、分析科学に関する国際英文誌 *Analytical Sciences* の月刊化 (1999年) を達成しているが、更に強力なグローバル化策として浮上したのが、日本分析機器工業会とタイアップし同会が主催する「分析展」と「東京コンファレンス」をジョイントして、毎年恒例の国際的な一大イベントに発展させる案である。

このアイデアの雛形は、何れも「ピッツバーグコンファレンス」の日本版を志向して始められた「応用スペクトロメトリー東京討論会」と「分析化学東京シンポジウム」に遡及できるが、運営母体が前者では5学協会 (応用物理学会、日本化学会、日本質量分析学会、日本分光学会、日本分析化学会) から派遣されたメンバーからなる実行委員会、後者では本会関東支部であったのに対し、「東京コンファレンス」は日本分析化学会の本部が全力を挙げて取り組む点で全く異なる。元々、「分析化学東京シンポジウム」は関東支部が5年間の時限で始めた事業であったため、その本部移管が四ツ柳隆夫会長 (2000年度) の時代から理事会の話題となり、高木 誠 (2001年度)・柘植 新 (2002年度) 歴

代会長のご尽力により、昨年9月の理事会において本部移管が正式に決定された。さらに、二瓶好正現会長の日本分析機器工業会との精力的な話し合いにより、「分析展」と「東京コンファレンス 2003」の幕張地区での同時開催が決定したのである。

「東京コンファレンス 2003」の成功には、日本分析化学会の支部・研究懇談会をはじめとする、会員諸氏のご理解・ご協力に加えて、日本分析機器工業会のパートナーシップが不可欠である。実行委員会を代表して、関係各位のご支援を心よりお願い申し上げる。

大学関係の方の意見

・東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について

神奈川大学 杉谷嘉則

多くの方が指摘されることであるが、東京カンファレンスとその後の分析化学会年の開催時期が近すぎるのではないかと、ということが挙げられる。近いが故に、日程調整の面でも、年会発表準備の上でもややきつく感ぜられる。

そして、東京カンファレンスは「産と学の交流接点」という視点を、従来にも増してはっきり徹底させたら如何であろうか。すなわち、学会では最新の研究成果を発表しなければならないが、ここでは、必ずしもそうでなくてよいとするのである。これまでに得られた研究結果も混じえて、まとまりのある形で「学」から「産」へ成果内容が伝わることを旨とするのが良いのではないかと。もしそのようにすれば、前記の2つの開催時期が近すぎることの難点も、ある程度解消するのではなかろうか？

・東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について

千葉大学 小熊幸一

「東京コンファレンス」は、日本分析機器工業会の「分析展」、新技術説明会並びに「JAIMAコンファレンス」と一体となって「日本版ピッツコン」を目指すものと理解しています。したがって、学会が担う「東京コンファレンス」の役割は、分析機器の利用上の基本的事項及び応用に関する講習会あるいはシンポジウムを中心に据え、これに各研究機関の研究紹介のポスターセッションを加えることによって、機器を利用する化学分析法と分析機器の進歩発展に寄与することと考えます。

一方、「年会」は、会員が分析化学に関する研究成果一般を発表する場であって、学問としての分析化学の進歩発展に貢献することを主目的とすべきものと思います。事実、従来の「年会」がオリジナルな研究の発表と各種シンポジウムを主体として開催されてきています。

新生「東京コンファレンス」が、伝統ある「年会」とともに、日本分析化学会会員諸氏にとって意義深い存在となることを願っています。

・東京コンファレンスと日本分析化学会年会のあり方について

「新たなビジョンに基づいた運営で」

武蔵工業大学 工学部環境エネルギー工学科 平井昭司

ようやく東京コンファレンスは動き出した。(社)日本分析化学会の本部事業としては年会と討論会に並ぶ非常に大きな活動である。しかしながら、この事業が生まれるまでには多難な問題と紆余曲折の議論等があり、担当した関係者はさぞご苦労されたことだろう。

東京コンファレンスが設立する要因はかなり昔から潜在的に存在していた。かつて(社)日本機器分析工業会と共同開催していた応用スペクトロメトリー討論会(通称:応スペ)は、社会的状況変化の中で機器分析東京討論会と名前を変え、また、1998年から時限的開催の関東支部主催の東京シンポジウムとも同時開催し、発展的に解消して東京コンファレンスが新たに生まれたと思う。この間に多くのことが議論されてきたが、大多数が望んできたことは、Pittsburgh Conferenceのような分析化学に関するアカデミックな情報活動と分析機器に関する先端技術の情報活動が併設されたものが企画されることであった。そこには大きな問題、一言で言うと年会と討論会のアクティビティを落とさずに新たな行事を行える企画と運営ができるだろうかということが立ち塞がっていた。

たまたま2000年度の副会長をしたとき年会と討論会の運営について見直すチャンスがあった。会員サービス、他学協会との連携、学会活動の活性化、運営業務の負担、財政の健全化等を判断基準のキーワードとして理事や支部長に意見を求めたことがあった。1、2回の会合ではその方向性はみられず、学会の財政問題や50周年記念事業開催の準備等で十分な議論もなく、残念ながら断ち切れになってしまった。その後はどのようなになっているかは不確かであるが、議論の不足を痛感せざるを得ない。学会として将来を見据えた新たなビジョンを構築したその上で東京コンファレンスが発足していれば、このように多くの方々に意見を求めることがなかったように思える。もう一度三つの行事のあり方を従来の枠にとらわれず検討し、学会が大きく飛躍することを望む。

産業界の方の意見

・東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について

理学電機株式会社 遠山 恵夫

東京シンポジウムとは、かつての応用スペクトロメトリー時代からの長い付き合いであるが、未だに分析展との係わりにこだわってしまうのは、分析機器工業会のメンバーゆえかもしれない。また、毎年参加しているPittconのコンファレンスと比較して見てしまうのもやむを得ない。これからの東京コンファレンスには是非何か新しい個性を発揮する場になって欲しい。例えは不適切かもしれないが、昨年のPittconでは狂牛病検査やテロ爆弾検出が、今年は化学兵器検出が特別セッションになっていたが、それなりに分析化学が社会にどう貢献しているかをアピールしていた。そうした意味で、東京コンファレンスとしての話題性が表面に出るようになればありがたい。古い話で恐縮だが、1990年

の東京討論会で「企業と学会とがお互いに期待するもの」と題してパネルディスカッションを行い、私もパネラーの一人として参画したことがある。その当時はまだトレーサビリティや不確かさの意義が整備できていない時期でもあり、企業と学会がお互いに相手に求めあう物がまだ多少でもあったように感じる。

話は飛躍するが、日本の分析機器産業にとって、日本の官学に対して致命的な不信感を持った原因は、バイ アメリカンの政府指令だった。企業による先進的な機器開発意欲と日本の分析化学に対する献身意欲が一気にそがれたのは事実で、未だにその後遺症に悩むメーカーも多い。そうした過去を払拭するような、日本発の斬新な分析手法が世界に発信される場に東京コンファレンスになることを夢見ている。

・東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について

(株) 島津製作所 分析計測事業部 東京カスタマーサポートセンター 鈴木康志

「産業界から」の立場からの意見を、とのことであるが、あくまで私見であることを予めお断りしておきたい。

東京コンファレンスと同時開催となる分析機器展も分析展と名称を変更し、機器に限定されたイメージから分析化学全般を対象にこの中で各種のイベント、学協会との共催行事も行ってきている。

その一方で、コマーシャル、アカデミックの差というものはまだあるように思う。

たとえば、分析展への来場者と学会年会への参加者ではその階層、目的とするところには差があるように思う。

分析展では、どちらかと言えばニーズに対してどの様な技術が提供できるかあるいは得ることが出来るかを求めているように思うし、年会ではもう少し先、近い将来に実現、導入したいもの、自分達のところでも取り入れられそうなもののアイデアを求めているのではないだろうか。

見方を変えれば、分析展では各メーカーが自社の、新製品や優れたところをアピールしたいのに対して、年会では分析技術の開発、工夫による手法の発表となるように思う。

ここで、東京コンファレンスが分析展と同時開催されることを考えると、先に述べたように分析展に来られる主にユーザーの方に、各社の主張、製品、独自の技術だけではなく、比較的早期に実現できるテーマあるいは既に確立できたことを紹介し役立てて頂ける内容を紹介できる場、年会と分析展の中間的、中継的な意味合いを持つのでは、と考えている。

ともあれ、分析化学に関わる関係者が一堂に会し、新しい技術を探り、それぞれの立場で共に発展していくことを願っている。

旧国立研究所関係の方の意見

・東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について

国立環境研究所 伊藤裕康

昭和48年の応用スペクトルに参加して以来、分析化学会年会にも殆ど参加していない小生が意見を述べるのはおこがましいと思いますが、学会に対する意見を述べたいと思います。近年、分析化学の重要性が軽んじられて、応用面、解析が注目されている。機器の自動化により基礎的な分析法技術、データの精度が分からなくともデータは得られるようになった。また、一方では、様々な資格認定制度があり、規格に沿った分析、管理が行われている。分析に関する常識、基礎がなくとも資格があれば出来るようになりつつある。このような状況で、学会の提唱等の活動は必要であり、話題性のあるテーマに固執することなく、会員の要望に添った活動が必要であると考えます。組織が小さい時は、和気藹々で小回りがきいて活発であるが、大きくなるにつれ権威等に制限され、自由度が無くなっていくようである。会員増の活動をしている学会があるが、その前にその組織の有るべき姿、目的、運営を検討するべきで、組織を維持するため、拡大の活動は本末転倒ではないだろうか。多少、厳しい意見を述べてしまったが、一会員の意見として参考にして頂ければと思います。

・東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について—特殊法人研究所の—分析者の私見

日本原子力研究所 米沢 仲四郎

筆者は日本原子力研究所（原研）で中性子放射化分析と放射化学分析に従事している。原研は特殊法人であり、国立研究所とは少し体質が異なるが、国立研究所に準ずる関東地区の研究所の分析者として、東京コンファレンスと分析化学会年会のあり方について私見を述べさせていただく。

筆者の場合、学会参加は自ら研究発表をする場合に限られ、交通費の点等から年会と討論会の両方に参加することは難しい。しかし、東京コンファレンスの場合、交通費が安いこと、そして分析展で最新の機器を見ることが出来る等の点から参加しやすい。このようなことから、年会と東京コンファレンスが一緒になれば、年会と討論会の両方に参加する機会が増え、数多くの研究発表を聞くことができる。年会と東京コンファレンスを一緒にするには地方の会員に反対が多いようであるが、その方が年会と討論会の参加者が多くなるようにも思われる。

特集 企業が求める分析化学を専攻した学生の像

・「企業が求める分析化学を専攻した学生の像」

(株) 日立サイエンスシステムズ那珂カスタマーセンタ 望月 康平

最近、企業活動（製品性能・機能、安全性、環境対応等）を計る手段として各種の科学計測が重視さ

れてきており、そのトレーサブルな計測値は国際的に通用する通貨とも言われる位置付けとなってきました。分析化学はその中でも、分析された結果の意味が厳しく問われる分野です。この重要業務を担う人材として分析化学専攻の学生への期待は大なるものがあります。何よりも、分析の重要性と難しさを認識し、その基礎を体験していることが魅力です。単なる知識では無く、分析操作の意味と適用範囲を経験し、判断できる能力を基礎として学んだ人材を期待します。分析機器の自動化が進み、分析全体への目配りが不足しがちです。サンプリングから前処理、分析操作、データ評価まで、分析の目的に沿った最適なプロシーダを考えられる基礎を身に付けた人材、それが企業から見た「期待する分析化学を専攻した学生像」です。企業活動の中で、分析技術を武器に、創造へのチャレンジに燃えた人材、そんな学生であって欲しいと思います。

・企業が求める分析化学を専攻した学生の像

(株)ブリヂストン研究部 加藤信子

企業が求める「分析」化学を専攻した学生の像をメーカーの立場から述べるのは難しい。当たり前のことであるが、分析を専攻した学生が分析部門に配属されるわけではないし、たとえ分析を担当したとしてもそれは一時的なものであることが多い。したがって、企業が分析化学を専攻した学生に求めるものは、一般の技術系学生に求めるものと変わらない。技術者に求められるのは、自分自身で課題を設定し、解決の手段を考え、実行し、検証していく能力である。そのときに、分析化学を専攻した人の強みとなるのは、いろいろな現象を科学的に解析できるツールを持っていることであろう。分析で得られた貴重な情報を、生かして、材料物性や様々な現象を解釈していくための材料科学に関する幅広い基礎知識があれば、鬼に金棒である。時に応じて、あるときは俯瞰的に、あるときは細部にこだわって物事を解析し、それを新しい「もの作り」に発展させる力と、未知のことにチャレンジする精神を望みたい。

ミニコミ

関東支部「新世紀賞」候補者募集

資格 ①2003年の4月1日現在で満36歳以上45歳以下の者。②研究業績は、本会論文誌又はその他の論文誌に公表されたものでなければならない。③受賞の基礎となる研究業績が共同研究の場合は、主たる研究者について適用する。④候補者となるべきものは会員の推薦によるもの及び、会員自ら申し

出たものとする。

提出書類 ①推薦書 [所定の用紙] , ②推薦理由書 [A4判用紙を縦 (1行 45字×40行) に使用し, 本文及び文献 (主要論文) を合せて 3枚以内で作成すること] , ③説明資料 [特に重要な論文の別刷, その他審査の参考となる資料]

締切日 10月31日 (金) 必着

書類提出先 〒141-0031 東京都品川区西五反田1-26-2 五反田サンハイツ304号 日本分析化学会関東支部 [電話: 03-3490-3351, FAX: 03-3490-3572]

茨城地区分析化学講演会

主催 日本分析化学会関東支部

期日 平成15年11月7日 (金)

13時30分～17時00分 (講演会) , 17時15分～19時00分 (懇親会)

会場 テクノ交流会館リコッテイ (茨城県那珂郡東海村 常磐線東海駅東口下車, 徒歩約1分)

講演

1. 液液, 液膜界面電気化学の新展開 (京都工繊大) 木原壯林
2. 極微量分析法の開発と応用 (日本原子力研究所) 安達武雄
3. 計測・分析とその信頼性 (日本分析センター) 高田芳矩

参加費 無料

懇親会 講演会終了後, 講師を囲んで同じ会場にて懇親会を開催します。会費 (3,000円程度を予定) を当日受付けます。参加希望者は10月31日 (金) までにお申し込み下さい。

連絡先 〒319-1195 茨城県那珂郡東海村白方白根2-4 日本原子力研究所

環境科学研究部 米沢仲四郎 [電話: 029-282-6098, FAX: 029-282-6961,

E-mail: yonezawa@analchem.tokai.jaeri.go.jp]

第26回分析化学若手交流会報告

東京都立大学大学院工学研究科 中釜達朗

第26回分析化学若手交流会が6月27日 (金) ～6月29日 (日) の3日間、ホテル東天光 (千葉県長生郡白子町) で開催された。前日まであまり天気がすっきりせず、この日も晴天、というわけにはいかなかったが、148名の参加で開始された。初日は受付を済ませた後オリエンテーションを行い、早速2題の話題提供を行った。ちなみに、本交流会では話題提供の司会をすべて精鋭 (?) の博士課程

在学者にお願いしたが、普通の学会に負けないほどの司会者ぶりを発揮していただいた。また、話題提供者はすべて修士課程在学者あるいは学部学生にお願いした。「質疑応答も含め30分」という過酷な条件にも関わらず、初々しさと共に、各所属の研究室においてかなり鍛錬（訓練？）されているという印象を受けた。

2日目は午前9時から2件の話題提供の後、関東支部「新世紀賞」を受賞された陳子林先生（NTT）および高津章子先生（産総研）のお二人に受賞対象となった内容を中心に発表していただいた。昼食をはさみ、4件の話題提供の後、「ぶんせき」キソの基礎―「目からうろこ」講座―と称して、前年幕張メッセで行った分析技術者基礎セミナーの内容を含め、質量をはかる、容量をはかることの基礎に加え、試薬、ガラス器具の取り扱い方、あるいは数値の取り扱い方などについてレクチャーおよび討論を行った。

3日目は、2件の話題提供の後、千葉光一先生（産総研）に不確かさやトレーサビリティ、およびその国内外での取り組みについて、優しく解説していただいた。パリでメートル原器を実際にご覧になったことなどを交え、先生自身が非常に楽しそうに講演され、かつ最終日にも関わらず参加者がその講演に引き込まれているのを見て、講義の参考になったという若手研究者もいた。アンケートを参加者に記入していただき、記念撮影を行った後、解散となった。

今回で私自身は3回目の参加であった。本会に参加、運営して一番感じたのは、学生の「若手交流会」に対する意識が多様化していることである。今後、運営形態や参加者数も含め、そろそろ再考する時期に来ていることを痛感した。

最後に、本会の運営に関してご協力いただきました石丸（三浦）恵美（千葉大工）、斎藤和憲（日大生産工）、島田勝久（アクアラボ）各氏にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。また、本会は関東支部、あるいは東北支部若手の会の方々の協力なしでは到底実施できなかつたものであります。この場を借りて重ねて厚く御礼申し上げます。

第44回機器分析講習会の報告

関東支部第44回機器分析講習会

茨城大学理学部地球生命環境科学科 大橋弘三郎

現場で役に立ち、わかり易い講習会を目標に、メーカーやユーザーの多くの方にも講義と実習を担当していただいた。関東だけでなく青森県や富山県などの遠方から多くの方が受講され、3コースとも定

員を上回り盛況であった。

各コースの概略は以下の通りである。

第1コース「誰でもわかる微量元素分析の基礎と実際」【ICP発光分析, ICP質量分析, 原子吸光分析】は, 6月19日(木)・20日(金)に島津製作所東京カスタマーサポートセンター(秦野市)で行われた。本講習会では, ICP発光分析, ICP質量分析, 原子吸光分析の基礎と実際を体得できるよう企画した。講師としては, 田尾博明氏(産業技術総合研究所), 岡田章氏(テルム環境エンジニアリング), 吉永淳氏(東大院新領域創成科学), 梅香明子氏(オルガノ), 進藤久美子氏(食品総合研究所), また実習は上記の講師の他に高坂正博氏(島津製作所), 田口正氏(日本インスツルメンツ)が4テーマを担当された。

第2コース「有機分析の基礎と実際」は, 7月2日(水)~4日(金)にパーキンエルマージャパン(株)(横浜市)で行われた。講義は始めに澤田嗣郎氏(東大院新領域創成科学)から有機分析概論と題して分析対象と方法の選択, 各分析法の特徴などについての講義, その後各論として前処理・精製法: 中村洋氏(東京理科大薬), IR: 古川行夫氏(早大理工), MS: 高山光男氏(横浜市立大理), NMR: 加藤信子氏(ブリヂストン)についての講義があった。2日目はFTIR, IRイメージング, 熱分析, 3日目はGC/MS, ヘッドスペースGC/MS, NMRのデータ解析について実習を行った。パーキンエルマーの引っ越しと重なり, 予定のスペースの確保が困難になりかなり狭苦しくなってしまった。実習の機種を絞り, 受講者をクラス分けして欲しいという受講者の意見が多くあった。講義の方は今回のような原理や理論などの基礎知識を中心とした講義を役立ってよかったという意見と, 実習内容に直結した内容を希望する意見に分かれた。藤原豊(住化分析センター), 川口謙(東レリサーチセンター), 臼倉浩一・世古民雄・辻井哲也(パーキンエルマージャパン)(以上実習講師)。

第3コース「高速液体クロマトグラフィーの基礎と実際」は, 7月14日(月)~16日(水)に日本環境測定分析協会(東京都江戸川)で開催された。今年から, 講義及び実習内容を一新し, 初心者から中級者向けの内容にした。講義は, (1)HPLC概論: 中村洋氏(東京理科大薬)を皮切りに, HPLCの各論について順次講義が行われた。講義担当者は, HPLC機器メーカーおよび試薬メーカーの技術者であり, それぞれ得意の分野を講義された。実習内容は, 配管・接続と装置の調整, 溶離液の調製と脱気, カラム分離とデータ解析, 前処理であった。実習終了後, 参加者全員での総合討論が行われ, 最後に「受講証」が渡された。佐々木俊哉氏(日本ウォーターズ), 三上博久氏(島津製作所), 黒木祥文氏(日本ミリポア), 澤田豊氏(関東化学), 重黒木明氏(ジューエルサイエンス), 大河原正光氏(横河アナリティカルシステムズ), 本田俊哉氏(日立ハイテクノロジーズ), 鎗田孝氏(産総研)(以上講義講師)。富澤洋(東ソー) 山下和之(資生堂) 本田俊哉・阿部敬子(日立ハイテクノロジーズ) 坊之下雅夫(日本分光)(以上実習講師)。

本講習会を開催するにあたって, 会場を提供していただいた島津製作所東京カスタマーサポートセンター, パーキンエルマージャパン, 日本環境測定分析協会, 講師の先生方, 指導員, 実行委員の皆様

感謝を申し上げます。

第1回の環境分析基礎講座入門コース

第1回 環境分析基礎講座報告

共立薬科大学 金澤秀子

平成14年度の新規支部事業として第1回環境分析基礎講座（Aコース）が平成15年1月28～30日の3日間共立薬科大学で開催された。分析の基礎を学ぶための実習が伴う講習会として職務経験2年以内の初心者向けの企画である。当初40名の予定が希望者が多く最終的には46名となり、職務経験5年以上のベテランの参加もあった。3日間とも午前中は講義、午後は実習という形式で、1日目は器具の取扱いや洗浄方法という基本事項からはじまり、2日目は分析値の信頼性、水や土壌といった環境試料の取扱いについて、3日目は食品分析というプログラムで行われた。3日目には、1・2日目の実習結果を使い分析値の取扱いについての講義を行うなど、より実践的で理解が深まるような構成であった。最終日の実習後に講習会の全項目にわたり試験を行い合格者には後日修了証が、また参加者全員に当日参加証が授与された。実習をともなった講習会ということで参加者アンケートの結果も好評であったため次年度も継続して行うことになった。

第2回 『環境分析基礎講座—入門（実習）コース—』

東京理科大学工学部 田中龍彦

世の中が高学歴社会になるに従い、‘分析の神様’と呼ばれる職人が減少して技術伝承がなくなりつつあります。又、大学においては、分析化学の実務教育がおろそかにされています。その結果、分析技術者の基礎的な知識レベルの低下が著しく、分析結果の信頼性の確保は困難になってきています。このような背景から、関東支部では、分析の初歩の実務者に対して座学だけでは身に付きにくい基礎的な教育訓練を、実習を通して習得していただくための講習会を企画しました。受講対象は、初級者（分析実務経験が2年以内の人）、分析化学基礎セミナー受講者、日本環境測定分析協会の「技術者基礎教育」受講者、基礎に立ち返って分析化学を学び直したい方、試験所の認定申請に際して分析化学の基礎研修が修了していることの証明が必要な方などです。

第一回目は、今年1月28～30日に共立薬科大学で行われました（受講者46名）。プログラムは、1. 信頼性のある分析・測定のために、2. 分析化学の基本操作、3. 実習：分析実験をはじめる前に一ガラス器具・天秤の取り扱い、4. 分析の質の保証、5. 環境試料の取り扱いについて（水試料、土壌試料）、6. 実習：容量分析実験（キレート滴定）、7. 分析データの取り扱い、8. 食品試料採取法及び試料前処理法、9. 実習：食品試料の分解法です。受講者の感想は全体に好意的でしたが、幾つかの

ご意見に関しては改善を図ってまいります。第二回目は、会場を東京理科大学に移し、同様のプログラム内容で平成16年1月19日(月)～21日(水)に開催します。本講座を教育訓練計画に取り入れられ、有効に活用されることを期待します。積極的なご参加をお待ちしております。

環境分析基礎講座報告

関東支部 副支部長 遠山 恵夫

関東支部では、「環境分析基礎講座」と銘打ち、広く分析化学の普及を進めると同時に、分析手法を正しく理解していただく場を提供する目的で、平成15年1月に開催いたしました第1回の入門(実習)コースを皮切りに基礎講座の運営を開始いたしました。

特に環境分析においては、それまで直接分析化学に携わっておられなかった方々が、分析需要の著しい増加などの社会的要請により、急遽化学分析をせざるを得なくなるという状況もあります。そのため、分析所によるデータのばらつきや、試料の取り扱いの不備など、分析手法の基礎部分の正しい知識が不足しているための混乱もあり、折角高価な分析機器を購入しても、所望の性能が発揮できなかつたり、得られた測定結果を正しく判断できなかつたりする事例も多くあると聞きます。反面、大学や専門学校において、こうした分析の基礎手法を教育カリキュラムの中で受講された方々の数も少なく、そのため分析所の各所で見よう見真似、試行錯誤的に努力されているのも事実です。

こうした皆様の悩みにお答えすべく、環境分析に焦点を絞った基礎講座の運営を開始した次第ですが、第1回の入門(実習)コースは、46名の受講者の方々に参加をいただき、分析化学の基礎中の基礎であるガラス器具類や天秤の取り扱い、水試料・金属材料・食品試料の取り扱い方を講義と実技で体験実習していただきました。参加いただいた皆様からも、こうした講習会の継続的な開催を希望する声が沢山ありました。本年度も、入門(実習)コースの第2回目を来年1月に計画しておりますので、是非振るってご参加いただきますよう、お願いいたします。

さらに、本年度からは、この入門(実習)コースの修了者、または日頃化学分析に携わってはいるが、もう一度広く基礎から勉強しなおしてみたいと考えておられる方々を対象に、もう1ランク上の、機器(実習)コースを計画しております。この機器(実習)コースでは、分析機器の基礎操作、分析機器への試料導入実習、分析機器の測定結果の読み方、などにつき講義と実習を行う計画です。実習していただく機器としては、環境分析に不可欠な ICP 発光分析、ICP-MS、原子吸光、ガスクロ、GC-MS、液クロ、イオンクロマト、紫外可視分光、FTIR(顕微付) および フローインジェクション 等を計画しています(機器の種類には多少変更が出る可能性があります) この機器(実習)コースの最大の目的は、全ての分析機器に直接触れて体験していただくことにあります。個々の分析機器を完璧に使いこなせるまで、という目的には機器分析講習会がありますが、本コースでは日頃操作したことのない分析機器を、活きた試料を使ってあなたの手で直接操作して体験していただくのが最大の目的です。開催時期は来年1月末で、開催期間は3日間、開催場所は JR 横浜駅近くを予定しています。詳細につ

いては、近々「ぶんせき」に掲載させていただきます。日頃から一度は色々な分析機器をいじってみたいとおられた方、ぜひ振るって参加してください。

編集後記

日本分析化学会関東支部ニュース14号をお届けいたします。関東支部の活動を広く知っていただければと思い、第1回東京コンファレンスに発行日を設定しました。お目通しいただければ幸いです。今回は、東京コンファレンスと分析化学会年会とのあり方についての紹介と説明」及び「企業が求める分析化学を専攻した学生の像」の特集を組みました。特集は次号に継続を予定しています。ご意見などお寄せいただけますようお願いいたします。なれない編集作業でしたので、行き届かない点も多いと思います、お許しただけましたら幸いです。最後になりましたが、原稿をお願いいたしました皆様に厚くお礼申し上げます。

支部ニュース担当幹事